

Special Essay

大学価値を決めるものとは

看護学科 自見厚郎

一両年後には高校生卒業生と大学入学定員が同数という全入時代に突入する。地方の私立大学や短期大学では定員割れに伴う廃校の危機が叫ばれている。生き残りのための戦略などという、およそ四十年前に団塊の世代が大学受験した頃には聞かれなかった言葉を耳にするようになった。グローバル化、規制緩和などの大きな変革のうねりが澎湃として起こる実業界と同様に、大学もまた生き残る競争力を厳しく問われている。こうした時代に対応するには、自身の価値を高め、高校生を送り出す高等学校や卒業生が就職する各病院の評価に堪える力を有していなければならない。教育は質の良い学生を育成することに尽きるが、工業製品とは異なり医療人を育成することは、医療マインドを吹き込むことでもある。

実習病院確保に苦慮している看護系大学があると聞くと、幸いなことに、本学科は大学病院という大きな実習の場所を利用できるので、器としては申し分ない。次に教育スタッフであるが、頭数を揃えただけでは済まない。医学の進歩、社会制度の整備などにより、医療サービスの内容が絶えず変わり、医療水準も向上しているから、質がさらに重要となる。学科価値向上の基本は能力のある多様な人材をいかに確保するかである。どの学校でも該当することであろうがベテラン教員は工場における熟練工である。理屈を捏ねくり回す理論家よりも、実技に長け、確実に精度を出せる熟練した技の教員は、学科の財産である。単調にならず、多種多様な人材を確保するためには必ずしも自校出身に拘泥せず、間口を開けて広く人材を求めることが必要である。

医療職の育成では一般に、技術、知識などを次世代が手渡して継承し、ベテランがさらに魂を吹き込んできた。定年がくれば引退していくベテラン自身の属する団塊の世代が、介護される側に立場を変えて行く時代が間近になれば、多くの医師や看護師を必要となる。質の高い医療や看護を遍く行い、維持して行くためにも、今の学生をベテランの域に挙げられるよう一層の努力しなければならない。

学力の低下が工学、医学系の教員から叫ばれるようになって、詰め込み教育を諸悪の根元にした教育観が呆気なく潰え、ゆとりなどと言うおよそ教育とは縁のない言葉を弄っていた時代が終焉を迎え、漸く文科省が学力テストを再開するという。遅きに失した感は否めないが、人材の力という無形資産をいかに増やして行くか。これからの学校競争の焦点である。教育機関として大学が、人材が金属疲労せずに自ら学習し成長し続ける組織を目指すならば、自ずとその価値は定まるであろう。